

人文会 ニュース

jinbunkai news

April 2022

NO. 140

1 15分で読む

沖縄〈復帰〉50年を考える

新城和博

15 書店現場から

街の本屋を続ける理由

木村 晃

22 図書館レポート

荒尾市 図書館+書店プロジェクト、
地域の活性化と本の力

藤戸克己・花田吉隆

37

編集者が語るこの叢書・このシリーズ⑳

サピエンティア・シリーズ

奥田のぞみ



www.jinbunkai.com

法政大学出版局

http://www.h-up.com/

イメージは殺すことができるか

マリ=ジョゼ・モンザン 著

澤田直 黒木秀房 訳

暴力やテロの映像が氾濫する現代。イメージが、見る者に現実の暴力や殺人への欲望を引き起こすという俗説は真実なのか。著者初の邦訳。 2420円

生き方としての哲学

J.カルリエ, A.I. デイ
ヴィッドソンとの対話

ビエール・アド 著 / 小黒和子 訳

古来、哲学は体系の構築である前に、人々が自然の神秘を受け止め、生の苦難を乗り越えるための精神の修練であった。自伝的な対話の書。 3300円

〒102-0073 東京都千代田区九段北3-2-3
☎ 03 (5214) 5540 / 表示価格は税込です

異色の哲学者がおくる
哲学からはじまる大人入門

「大人」になる君へ

中高生のための哲学入門

小川仁志 著

四六判美装 204頁

1760円

その一生を未来を生きる中高生に伝える

命のビザ 評伝・杉原千畝

——一人の命を救う者が全世界を救う

白石仁章 著

四六判美装 296頁

2420円

ミネルヴァ書房

〒607-8494 京都市山科区日ノ岡堤谷町1
TEL075-581-0296 価格税込/宅配可

WORLD WITHOUT WORK

サスキンド。技術革新が労働を特権化する世界が来る。若手経済学者が21世紀の分配国家を提言。上原裕美子 訳 関谷円

私にぴったりの世界
スロヴロネク 服飾店に生まれた移民四世女性の目からユダヤ系アパレル業界の盛衰を描く社会文学。宮林寛 訳 関谷円

パッシング／流砂にのまれて
ラーセン 白人と偽り生きた黒人女性 越境者。ジャズが響くハリレム・ルネサンスの傑作小説。鶴殿りか 訳 関谷円

鍛え造る 秋山実写真集
名工、千代鶴是秀はじめ、半世紀余にわたって撮り続けてきた大工道具名品の集大成。全22点。解説・土田昇。一六〇〇円

気候適応の日本史

人新世をのりこえる視点
(歴史文化ライブラリー)

中塚 武著 気候変化のスピードが、いかに社会に影響を与えたかという視点で描く初めての通史。 (2刷) 1980円

近世感染症の生活史

医療情報・ジェンダー

鈴木則子 著 生活環境の移り変わりによる感染症へのまなざしの変化を描き、社会と感染症との共生する姿を考える。 3520円

「洗う」文化史 「きれい」とは何か

国立歴史民俗博物館・花王株式会社編 私たちはなぜ「洗う」のか。様々な事例を取り上げ、現代の清潔志向の根源を探る。 2420円

家と子どもの社会史

日本における

鈴木理恵編 歴史学・文学・教育学・社会学の研究が集い、フィールド調査などに基づき、一家の後継者育成を解明。 7700円

吉川弘文館

東京都文京区本郷 7-2
☎ 03-3813-9151 税込

みすず書房 (税込)

東京都本郷2-20-7 www.mszz.co.jp

沖繩 〈復歸〉 50 年を考える

新城 和博（編集者）

〈復歸〉は沖繩のぼくらの生活のなかで寄せては返す波のようだ。あるときは大波、あるときはだれにも気がつかれないようなさざ波。しかしそれはけっしておさまることのないうねりである。ゆれ動く大海のなかで、沖繩はどこへ行こうとしているのか。〈復歸〉が時代の節目としてとらえられるとき、「沖繩にとって〈復歸〉とはなんだったのか」という問いが、海を越えて響いてくる。

沖繩では日常的に使うこの〈復歸〉という言葉は、発せられる局面によって、また書き手の意識、視線の自覚的な有り様によって、「日本復歸」「沖繩復歸」「本土復歸」「祖国復歸」「沖繩返還」とさまざまな用語で使われる。

沖繩で地域出版に携わって30年以上たつのだが、〈復歸〉10年ごとの節目になると「沖繩にとって〈復歸〉とはなんだったのですか」という問いが、中央メディアから何度も投げかけられてきた。復歸20年となる1992年、首里城が国営公園として再建され、「沖繩ブーム」と呼ばれる喧噪のなか、くりかえしその問いに答えるうちに、ぼくはある結論に達した。「日本にとって『沖繩の復歸』とはなんだったのか」ということを総括しないで、あくまでも沖繩の問題として説明を求め、そのあり方こそ、「沖繩問題」ではないかということだ。〈復歸〉という歴史的節目をもった沖繩へときおり思い出したかのように蘇ってくる「沖繩にとって〈復歸〉とはなんだったのですか」。ぼくはその問いを「日

本にとって『沖繩の復帰』とはなんだったのですか」と投げ返すことによって、相対化してきた。

しかしそもそもぼく自身も特に〈復帰〉についてなにかしらの研究・調査をしているわけではない。復帰50年について総括することなど手に余ることである。しかし『増補改訂 ぼくの沖繩〈復帰後〉史ブラス』という自著があった。これは復帰40年のときに「沖繩復帰後史 我らの時代のフォークロア」として、沖繩タイムス社で連載したものを2014年に新書化し、その後2回の改訂で2020年までのトピックを追加しまとめたものだ。沖繩の復帰後起こった社会的な出来事と個人的な体験を、あくまでも那覇で生まれ育った人間の極めて個人的な思い出、(客観的に見れば)ある種の生活史と社会的な出来事を重ねて、この半世紀の沖繩について語ってみた。〈復帰〉という鏡をもって己の姿を映し出してみたいわけだ。2021年には沖繩の近現代史の若手研究者たちが企画した『つながる沖繩近現代史』の編集・刊行に携わった。アメリカ提督ペリーが来流し、明治政府による「琉球処分」が行われた19世紀末から、沖繩戦をへて、アメリカ統治下から日本復帰を果たし現在にいたる

までの沖繩の近現代史を、さまざまな社会的なトピックをベースにして、ひとつの通史としてつなげた内容だ。その第四部「アメリカ世と日本復帰にひきまかれて」、第五部「沖繩社会を編みなおす」は、復帰後の沖繩についてさまざまな諸相を取り上げている。たとえば「アメリカ膨張史のなかの沖繩」(池上大祐)、「日本復帰と『開発の時代』」(秋山道宏)、「復帰運動を『総括』する」「くりかえす沖繩ブームと基地問題」(古波藏契などの論考は、復帰を体験していない若い世代の研究者が新たなフレームを提示して「沖繩問題」にとりくんでいる。沖繩で出版に携わっているものとして、あらためて〈復帰〉とはなんだったのかという問いを、主にこの関わった2冊をよりどころとして自問自答してみよう。復帰50年を振り返る。しかしまずは〈復帰〉にいたるまでの前提がある。

〈復帰〉にいたるまで

今年発表された琉球新報社の世論調査で、「沖繩の近・現代の出来事で、何が重要だと思いますか(3つまで選択可)」という設問があった。1位はダントツで「沖繩

戦」であるが(39・7%)、コロナ禍、首里城正殿焼失など、最近の出来事に続くなかで「復帰」(4位)と「琉球処分」(9位)が挙げられていた。琉球処分、沖縄戦、復帰という連続する歴史観は、沖縄で広く共有されている。特に沖縄戦と復帰は、切り離すことのできない歴史体験なのである。

1945年の沖縄戦ののち、1947年のいわゆる「大皇メッセージ」によってアメリカによる琉球諸島(沖縄・奄美地域)の軍事的占領が密約され、沖縄は事実上、日本本土から分離された。日本は沖縄をアメリカ軍が長期占領することを望み、沖縄の施政権は日本からアメリカに移った。具体的にいえば、アメリカ軍の存在が島々の隅々に及ぶということだ。米軍は軍事的要塞として長期保有するために、沖縄の経済復興と自治機能の整備に取り掛かるべく、1950年「琉球列島米国民政府」(USCAR…ユースカール)を設置する。

1952年のサンフランシスコ講和条約発効によって、日本は主権を回復し、国際社会に復帰する。同年、沖縄・奄美地域は、住民によって構成される琉球政府が置かれ住民自治の形を整えるが、それはあくまでアメリカ

カ統治下において許されるかぎりの自治である。その関係は「猫と鼠」の力関係にたとえられた。奄美地域は、1953年に日本に返還される。そして沖縄はその後1972年の日本復帰までの27年間、アメリカ統治下が続いた。このように沖縄は、日本、アメリカ、それぞれの施政権のやりとりの下で、翻弄されてきた。要するに〈復帰〉とは、沖縄の施政権の移動である。アメリカ統治下の沖縄に対して、日本は「潜在的な主権」があるとした。このまことに奇妙な言葉は、複雑怪奇な仕組みによって無理くり正当化された沖縄占領という「法的怪物」の正体のひとつだ。現実には米国民政府に統治されているが、琉球政府という行政機関をもつ沖縄に対して、本土から切り離れたはずなのに、沖縄に対して潜在的な主権を保持しているというのだ。「沖縄」という主体はまるでかげろうのようで、どこにも存在していないように扱われている。

〈復帰50年〉のいま

1972年〈復帰〉のとき、ぼくは沖縄・那覇で、

小学4年生だった。半世紀たったが、あいかわらず那覇に住んでいて、来年は還暦を迎える。どこか他人事のように時が過ぎていったと感じるのは、沖繩はいまも、日本・アメリカ双方の関係性のなかで、なんら変わらないうように見えるからだ。いま「沖繩ってどういうところ？」という質問がきたら、たとえばこういうことが思いつく。

今年1月のこと、那覇に住んでいる知り合いが数名、ツイッターで「いまゆれた？ 地震？」とつぶやいたことがあった。ぼくは那覇で仕事をしていたが、まったく気づかず、そのゆれを感じた人もそう多くはなかった。しかしそれは確かにゆれていたのだ。その夕方、那覇港沖で不発弾処理があったというニュースを知った。その不発弾は前年の3月から11月にかけて那覇新港の岸壁工事の際に発見されたアメリカ製5インチ砲弾や7・62ミリ小銃弾などで、12月にも一度319発の不発弾が水中爆破されている。その日、残りの315発を、海上自衛隊の作業で水中爆破したのだった。確かに12月の不発弾処理のときは、港近くのビルの窓ガラスもゆれるほどの震動を感じたらしく話題にもなったのだが、2度

目ということで、その日、那覇をかすかにゆらした不発弾処理のことは失念していたのだ。

不発弾は沖繩では日常的な話題のひとつである。沖繩戦で米軍が落とした爆弾のいっただれくらい割合で不発弾があるのか知らないが、1972年の復帰のころ、不発弾を処理するのに、50年をはかるといわれていた。そしてそれは復帰20年のころも、復帰30年のころも、復帰40年、そして今年もまた同じように、あと50年をはかるだろうといわれているのだ。車を走らせながら、道路工事を知らせる立て看板と同じように「不発弾処理のため通行止め」の立て看板を見かけることもある。新聞でも不発弾処理の記事は、ごく日常的に載っている。爆発しないかぎり大きなニュースではないのだ。

地元新聞では沖繩戦に関するニュースや記事、関連する連載はほぼ毎日掲載されている。沖繩戦の実相はまだまだ語られていない、記録されていないことが多い。一方で沖繩戦研究も進み、新たな事実も明らかになっていく。また沖繩戦を体験した世代がこれからの世代にどう伝えるか、直接伝えることのできるぎりぎりの時期なのである。沖繩においてあの戦争はまだ続いている、とも

いえる。

第四次嘉手納基地爆音訴訟は、今年1月に起こされた。第一次訴訟は1982年というから復帰10年目のことだ。嘉手納基地飛行場への飛行差し止めの訴えはことごとく却下されている。普天間基地や東京の横田基地や神奈川の厚木基地などでも米軍基地の爆音訴訟が起こされているが、いずれも日本の司法は「米軍の活動を規制する権限は日本政府にはない」とする判決である。

普天間基地に配備されている米軍のオスプレイの演習は日常化し、それは基地周辺や基地の集中する中北部だけでなく、那覇や南部の住宅地上空でも頻繁にやってくる。この原稿を書いている2月には、初めて那覇軍港で米軍の新たな演習が行われている。

現在、いわゆる「沖縄問題」といえば「普天間基地移設」「辺野古沖新基地建設」問題があたまたに描かれるだろうが、実は沖縄の生活の隅々にさまざまな「沖縄問題」はしみこんでいる。挙げればきりが無い。しかし少なくともこうした日常を踏まえたうえでしか〈復帰〉を語ることはできないのだ。

1970年代 制度の変化

沖縄が日本に〈復帰〉するまでのプロセスと〈復帰〉してからのプロセスは、同じ〈復帰〉体験とまとめて語ることはできない。「純粹な復帰者」であった屋良朝苗が、琉球政府最後の主席として「祖国復帰」を目指して当選したが、「即時全面米軍基地撤去」を求めた復帰は結局実現せず、1972年5月15日、那覇市民会館で迎えた復帰式典を苦渋の表情で迎えた。その日は雨が降り、市民会館に隣接する与儀公園では、反復帰運動の大会が開催されていた。あれほど望んだ、異民族支配からの脱却、祖国復帰がこんなにもにがにがしいものであったのか。小学校4年生のぼくには思いもよらないことであるが、その日、雨が降っていたことはよく覚えている。1972年〈復帰〉後の最初の10年というのは、社会制度的にもっとも変化のあった年であろう。まさに〈復帰〉という体験をしていたといえる。「ドルから円」への通貨交換と「車は左、人は右」の交通法規変更(1978年)は、まさしく目に見える変化である。〈復

婦)がまずぼくたちに求めたのはこうした制度の変化、つまり外面の変化である。子ども心にそれまで使っていた1¢^{セント}コインに比べて1円玉があまりに軽くて、まるでおもちゃのようだと思った。

実施された7月30日にちなんで「ナナサンマル」と呼ばれた交通法規変更は、一夜にして車の進行方向が逆になるといふ、ある種の社会的実験のようである。当時ぼくのような子どもたちは、そうした変化に対して柔軟に適応していったが、社会全体としては、「復婦」というプロセスをこなすのに精一杯であっただろう。

沖縄は、こうした変化を受け入れた。なにしろ沖縄の大衆運動によって勝ち取ったはずの「復婦」である。日本国憲法、特に第九条のもとに復婦したのだから。

1972年から実施された日本政府の「沖縄振興開発計画」の基本的目的は「本土との格差の是正」と「自立的発展の基礎条件の整備」である。社会インフラの整備として道路建設などの大規模の公共事業を柱に沖縄県の「開発」を促していく。復帰三大事業として「沖縄国際海洋博覧会」(1975〜76年)、「沖縄復帰記念植樹祭」(1972年)、「復帰記念沖縄特別国民体育大会」

(1973年)などが行われた。道路や観光施設建設の工事、そして観光客の増加などを見越し「沖縄経済の起爆剤」といわれた海洋博は、実際にはイベント終了後にホテル業や建設業の倒産が相次ぎ「海洋博不況」をもたらした。「沖縄経済の自爆剤」と揶揄された^{*1}。

1980年代、内面の変化の強要

80年代に入ると、沖縄県民はいよいよ内面の変化が求められるようになる。1986年の「日の丸・君が代問題」とは、文部省が、それまで実施率0%に近かった高校の卒業式での「日の丸掲揚」と「君が代斉唱」の実施を迫り、教育現場が大混乱に陥ったことである。1987年の「海邦国体開催」では、ソフトボール会場で住民の反対を押し切って掲げられた日の丸が焼き捨てられる事件が起こる。日の丸と君が代は、沖縄戦においても、アメリカ統治下でも、「祖国」の象徴であった。しかしどの施政権下にあるのかによってまるで意味合いが変わってくる。復帰10年たった沖縄では、沖縄戦の記憶とダイレクトにつながるものだった。1989年

『慰霊の日』休日廃止問題」も、沖縄が日本国民としての立ち振る舞いを迫られたことにより起こった問題である。

1985年「西銘順治『沖縄の心』発言」は、当時の西銘順治沖縄県知事が朝日新聞のインタビューで「沖縄の心とは」と質問されて「ヤマトンチュー（大和人）になりたくて、なり切れない心」と答えたというものだ。〈復帰〉を内面化する際の沖縄の苦痛を凶らずも露呈したものだといえる。社会インフラや生活、経済の充実を目指し、「本土に追い付き、追い越せ」というスローガンまで唱えられたこの時期での発言である。

公共イベントを踏まえてのインフラ整備は、80年代からより顕著になる。海洋博開催時に建設された沖縄高速道路は、海邦国体開催にあわせて、ようやく那覇を起点に中部、北部をつなぐ道路となった。

80年代、日本はバブル経済期を迎えていた。日本全体がかつて経験したことのない好景気に浮かれ、そのなかで沖縄はリゾート地としてのイメージが定着していた。日本のなかの外国として亜熱帯イメージが強調されるようになる。沖縄島北部、恩納村の海岸線には次々と

リゾートホテル、プライベートビーチが整備された。

〈沖縄〉はヤマトンチューにはなりきれないが、リゾート地として、亜熱帯イメージと異文化カルチャー、そしてどこでもない場所としてのホテル・リゾートとしての「オキナワ」にはなりうるのだ。²

80年代は、県民生活が日本全体の消費経済体制のなかに取り込まれた時代でもある。1975年にいち早く沖縄に進出したダイエーをはじめとして、80年代にはホットスパ、ファミリーマートなど国内チェーン店舗が進出し定着してきた。

沖縄県民の意識も変化していた。NHKが長年実施している世論調査では、復帰の評価を「非常に良かった」「まあよかった」と評価する割合が80年代に入ってから初めて6割を超えるようになる。³

1990年代、混乱のはじまり

〈復帰〉を内面化してきた沖縄のベクトルが変わってきたのではないか、その予感が1990年の「大田革新県政誕生」であった。「本土並み」から「沖縄らしさ」

を求める時代の節目として、自民党政権と太いパイプをもっていた保守派の西銘県政から、社会学、平和学の研究者であった革新派の大田昌秀知事の誕生は、90年代沖縄のその後を大きく左右した。大田の原点は、沖縄戦において、鉄血勤皇隊として動員されて、戦場をさまよい多くの学友の死に接しながらも九死に一生を得る体験をしたことだ。

琉球政府時代の行政ビルは復帰後も沖縄県庁舎として使われてきたが、1990年に同じ場所に新しく沖縄県庁舎が建てられた。復帰20周年である1992年には、琉球王朝の象徴といえる首里城が復元され、国立公園としてオープンする。これらは沖縄県の独自性を表すものでもあったが、同時に「日本になった沖縄」の姿でもあった。一方、沖縄の若い世代はサブカルチャー的表現として、沖縄を再発見しようとしていた。特に音楽の部分でそれは顕著にあらわれ、「沖縄ポップ」というジャンルを形成していた。「沖縄ブーム」という言葉も飛び交うようになり、その動きは復帰20周年にピークを迎えた。

〈当時、沖縄が注目されるのも、この復帰二十周年で

ひと区切りとなるだろうといわれ、日米政府からのビッグ・サブライズとして、米軍基地の一部が返還されるのではないかしらと期待していたのだが、そんなことはまったくなく、復帰二十周年最大のイベントといえ、戦後初めて復元された琉球王朝文化の象徴である首里城の開園ということになるだろう。*

しかし、「復帰20周年」に騒ぐ中央メディアが、「ヤマト化の完成形としての沖縄ブーム」の枠にとどまるものが多いのは、結局「日本にとって〈沖縄〉とはなにか」という問題を提示しきれない限界を表しているのではないか。この限界は、1995年の3人の米兵による少女暴行事件から端を発した、日米地位協定の見直しと米軍基地の縮小撤去を要求する全県民的な抗議行動によって顕在化した。翌年には、米軍基地の是非をめぐる、日本初となる「県民投票」が行われた。

一方で、〈復帰〉の内面化は、本格的な大型ショッピングモールが登場することによって、新たな展開を見せる。大型ショッピングモールが次々と展開する郊外化の風景は、日本の地方都市で見られるものである。沖縄では、その変化は1990年以降、急激に進み、それと

ともに、戦後の復興期から復帰後も庶民の生活を支えてきた市場（まちぐわ）界隈が次第に衰退してきたのである。それは「沖縄らしさ」の喪失ともとらえられた。消費行動とそれに伴う風景において、沖縄は日本の郊外と同一と見ることもできるだろう。しかし郊外型ショッピングモールのある場所の多くは、返還された米軍基地跡地なのである。

1998年、普天間基地撤去のための代替案として日本政府が示した名護市辺野古沖新米軍基地建設を争点とした県知事選では、保守派で経済界の分厚い支持を受けた経済人・稲嶺恵一が初当選する。この選挙結果は、自民党と公明党が選挙協力したもともと早い例となる。このときの保守側の参謀が、のちに「オール沖縄」という政治勢力を作り出し、日本政府と基地問題において全面対決することになる、当時の那覇市長・翁長雄志である。

2000年代、くりかえす沖縄ブームと沖縄問題

2000年に行われた沖縄サミット以降、混沌とする普天間基地移設・代替新基地建設問題により社会的閉塞

感すら漂っていた沖縄県内の状況とはうらはらに、観光業をはじめとした全国的な「沖縄ブーム」が起こる。観光客が増加してきた目に見える変化は、「沖縄イメージ」の変化でもある。復帰関連事業の象徴であり、復帰後の「沖縄イメージ」の原点ともいえる海洋博の水族館がリニューアルされて「美ら海水族館」となった2002年は、まさに「沖縄ブーム」とも呼ばれる様相を呈していた。それまで何度もあった「沖縄ブーム」は全国的に見ればさざ波のようなものであったが、この時点での「沖縄ブーム」は、沖縄の物産が売れるようになったという点で、明らかに違う段階に入った。いわゆる「消費される沖縄」である。衰退化していた市場（まちぐわ）も観光客に積極的に対応することによって、新たな活路を見いだした。沖縄の生活文化そのものも、「沖縄イメージ」として開かれたものになったのだ。そしてそれは沖縄人自身も、自ら「沖縄イメージ」の消費者であるということでもある。「長寿で明るく精神的に豊かな沖縄」というポジティブなイメージが注目されることによつて、「基地の島」沖縄が抱える諸問題が不思議なくらい静かに覆い隠されたのだ。しかし2001年9月

11日に起こったアメリカ同時多発テロ事件の影響で、米軍基地が集中する沖縄は一時的に日本からの観光客が激減する。その後のアメリカによるアフガニスタン空爆、イラクへの侵攻を含めてアメリカの戦闘は、沖縄と直結している。

2004年、沖縄国際大学に訓練中の米軍ヘリが墜落する。幸いにも事故による死者はいなかったが、米軍は大学キャンパスを含む事故現場一帯を封鎖し、沖縄県は立ち入ることすらできなかった。当時日本国民に大人気の小泉純一郎総理は休暇中を理由に、事故の対応のため会見を求めた稲嶺恵一沖縄県知事とは面会しなかった。沖縄との温度差をあらためて感じた出来事である。2007年には「教科書検定問題」が起こり、沖縄の「集団自決」の記述をめぐり、検定意見の撤回を求める県民大会が開かれる。この大会は政治姿勢としての保革を超えた政治家や多くの県民が参加して「復帰後最大規模」となった。新基地建設問題では、建設容認派と断固反対派にわかれて、深刻な対立をしていた沖縄だが、沖縄戦の記憶、記録をゆがめようとする国の動きに対しては、一致団結することができるのである。この保革を超

えた集結はのちの「オール沖縄」という政治的潮流を生み出していく。

2010年代 「イデオロギーからアイデンティティ」の行方

「復帰40年」を迎えた2012年、日米政府の合意で、沖縄の米軍基地にオスプレイが配備された。当時沖縄県政は、保守の仲井真弘多県知事が2期目を迎えていた。しかしねじれにねじれていた普天間基地移設問題は、沖縄県内の政治情勢としては保革を超えた「オール沖縄」としてまとまり「県外移設」を打ち出していた。そんななかで米軍のオスプレイ配備が強行されたのである。10月沖縄の抗議行動を無視するかのように飛来してきたオスプレイは、当初予定されていた上空訓練地域を当然の権利のように拡大して、沖縄上空を飛び回っている。住民の多くは、いつのまにかオスプレイがもたらす振動音が区別できるようになった。墜落事故や部品の落下なども相次いでいる。しかしその事故原因について米軍からのまともな回答はほぼない。日米地位協定に基づき、日本政府も明確な回答をしない。こうした基地問題は、民

主党政権下(2009〜12年)においても、解決するどころか、本土と沖縄の溝がさらに深まったように感じた。

2013年年末、返り咲いた自公政権下で、大幅増加した振興予算の見返りに、仲井真知事は「辺野古沖埋め立て」を承認する。翌14年、「承認撤回」を掲げたオール沖縄の翁長雄志は仲井真との知事選を圧勝する形で新しい県知事となった。「イデオロギーよりアイデンティティ」という翁長知事の訴えは、普天間基地移設問題に関して、日本政府と全面対決を辞さなかった。その姿勢は沖縄県内では「島ぐるみ闘争」ふたたびともいえる圧倒的な支持を得ていた。このころから政府に対して異議申し立てする沖縄の立ち位置について、「沖縄ヘイト」ともいえる言説が公然と行われるようになる。辺野古沖の埋め立てについて、沖縄県と国は、それぞれ裁判を起こし複数の法廷闘争が繰り広げられ、事態が膠着するなか、2018年、志なかばで翁長知事は急逝し、その後継となった玉城デニー前衆院議員もふたたび新基地建設反対を打ち出し、知事選で大勝した。しかし翁長というカリスマを失ったオール沖縄勢力は、政府の強い

介入により経済振興、生活重視を打ち出す自公保守勢力の巻き返しに押されている。

NHK沖縄の世論調査によれば、「本土の人は、沖縄の人の気持ちを理解していると思いますか」という質問に対して、「あまり理解していない」または「全く理解していない」と答える人の割合が、1995年の48%を境にして、増加し続けている。2002年は57%、12年には71%に達した。そこには「反対の民意を何度も表明しても、「粛々と工事を進める」とする態度を崩さない日本政府、そうした政府の姿勢を黙認し続ける日本本土の人々。一方で沖縄に「失われた日本」を投影して褒めちぎり、他方では本土に置き場のない米軍基地を押し付けて平然としている日本本土社会——こうしたイメージが、沖縄と日本本土との間に容易に解消し難いわだかまりを生み出してしまったように見える。^{※5}」

しかし一方で全世界的なコロナ禍に見舞われるまでは、沖縄の観光客数は右肩上がりであり、1995年ころの300万人台から、2010年ころからは増加した中国、韓国、台湾などのインバウンドもふくめて、1000万人を超えていた。沖縄と日本の距離は近く

なったが、埋まらない溝は深くなったというのは、なんとも悲しい話である。

戦後50年から復帰50年の間に

こうして見ると、1995年という年がひとつの転換期になっているのは確かだ。奇しくも「戦後50年」にあたる年に、日本では阪神・淡路大震災、オウム地下鉄サリン事件が起き、沖縄では日米地位協定の見直しと米軍基地の整理縮小を求める動きが大きくなりとなった。アメリカ、日本政府が、普天間基地の5年以内の閉鎖と早期返還の合意を発表したのが1996年のことだ。そもそもは米軍基地の整理・縮小なのである。それがいつのまに新基地建設の是非をめぐる問題となっていく。なぜこのような奇妙なことになっているのか。

新基地建設には断固反対で、幾度も行われたさまざまな県民大会に参加しているが、座り込みなどの実質的な行動に参加していないばかりのようなものでも、今年1月に行われた名護市長選挙の結果には心悩まされる。それは単純に基地建設賛成、反対という表象ではないのにも

かわらず、市民が分断され続けている有り様が、時に闘う沖縄の象徴として、あるいは国の政策に飲み込まれたかのような二項対立的に扱われていくことだ。しかし沖縄は、復帰前の「島ぐるみ闘争」「祖国復帰運動」から、復帰後も米軍基地や教科書問題などをふくめて、その局面で意見を闘わせ、民意として表明してきた。それは大きなうねりともなるし、時にしずかな波にもなる。しかしとどまってははいない、この動きはみんなつながっているのだ。

こうしてみると「沖縄問題」とひとくくりにできるものはなにもない。そもそも沖縄の問題ではなく、沖縄が抱え込まされた日本とアメリカの関係性の問題ではないか。具体的には、日米安保に基づく地位協定の不平等性のしわ寄せが沖縄に集中していることであるが、それはいまも潜む「潜在的主権」の影のようだ。復帰前、日本はアメリカ統治下の沖縄に「潜在的な主権」があるとした。しかし復帰後の沖縄は、日米地位協定下において、今度こそ逆にアメリカに「潜在的な主権」があるかのように振舞われている。そして復帰50年のいま沖縄から日本全体を俯瞰すると、日本そのものにアメリカの「潜在的な主

権」の影が覆っているかのように見えてくる。

「〈復帰〉とはなんだったのか」という質問が過去形になりえないのが、沖繩のいまの姿である。それは常に進行形の現象なのだ。そしてそれにはまだ終わりが示されていない。あらためて問いたい。日本にとって「沖繩の復帰」とはなんなのか。

本稿の執筆に当たり前田勇樹・古波藏契・秋山道宏編『つながる沖繩近現代史——沖繩のいまを考えるための十五章と二十のコラム』を大いに参考にいたしました。改めて謝意を表します。

注

* 1 秋山道宏「日本復帰と『開発の時代』」前田勇樹・古波藏契・秋山道宏編『つながる沖繩近現代史——沖繩のいまを考えるための十五章と二十のコラム』ポードアインク、2021年。

* 2 新城和博「一九八五年 西銘順治『沖繩の心』発言」増補改訂『ぼくの沖繩〈復帰後〉史』ポードアインク、2021年。

* 3 NHK「本土復帰後40年間の沖繩県民意識」2013年。

* 4 新城和博、前掲書「一九九二年『首里城公園』開園」。

* 5 古波藏契「くりかえす沖繩ブームと基地問題」前田・古波藏・秋山編、前掲書。

新城 和博(しんじょう かずひろ)

1963年、沖繩・那覇市生まれ。琉球大学法文学部社会学科社会人類学コース卒業。1990年より出版社ポードアインクに編集者として勤務。著書に『うちあたいの日々』『太陽雨』の降る街で、『パンパッ! おきなわ白書』『道ゆらり』『うっちゃん党宣言』『増補改訂 ぼくの沖繩〈復帰後〉史』『ぼくの〈那覇まち〉放浪記』(ポードアインク)ほか、共著多数。

15分で読む 沖縄〈復帰〉50年を考える ブックガイド

ブックリストは、『つながる沖縄近現代史』編者である前田勇樹(◎)、古波藏契(★)、秋山道宏(▲)の諸氏にお願いし挙げてもらったものである。新しいフレームで〈復帰〉とはなにかを考えるためのリストとしたい。●は本稿の参考文献。

出版社	ISBN(978)	書名	著者名	本体価格	刊行
沖縄県教育庁文化財課史料編集班編	—	◎沖縄県史 各論編8 女性史	沖縄県教育委員会	品切れ	2016
中公新書ラクレ	4121502872	◎沖縄イメージを旅する——柳田國男から移住ブームまで	多田治	品切れ	2008
世織書房	4902163452	◎▲沖縄戦、米軍占領史を学びなおす——記憶をいかに継承するか	屋嘉比取	3800	2009
岩波新書	4004111047	◎米軍と農民——沖縄県伊江島	阿波根昌鴻	780	1973
NHK出版(生活人新書)	4140881507	◎沖縄「戦後」ゼロ年	目取真俊	品切れ	2005
岩波現代文庫	4006033132	★沖縄の歩み	国場幸太郎著、新川明・鹿野政直編	1320	2019
インパクト出版会	4755402418	★琉着の思想——「沖縄問題」の系譜学	富山一郎	3000	2013
講談社現代新書	—	★日本国改造試論——国家を考える	平恒次	品切れ	1974
社会評論社	4784509133	★白地も赤く百円ライター——知花昌一新・非国民事情	下嶋哲朗	1500	1989
誠信書房	4414400960	★野の医者は笑う——心の治療とは何か?	東畑開人	1900	2015
沖縄タイムス社	—	▲現代沖縄の文学と思想	岡本恵徳	品切れ	1981
明石書店	4750347875	▲沖縄と朝鮮のはざままで——朝鮮人の〈可視化／不可視化〉をめぐる歴史と語り	呉世宗	4200	2019
凱風社	4773638066	▲沖縄を越える——民衆連帯と平和創造の核心現場から	新崎盛暉編著	品切れ	2014
晩聲社	4891880248	▲虐殺の島——皇軍と臣民の末路	石原昌家	品切れ	1978
ポードアインク	4899824169	●つながる沖縄近現代史——沖縄のいまを考えるための十五章と二十のコラム	前田勇樹・古波藏契・秋山道宏編	2200	2021
ポードアインク(ポードア新書)	4899823544	●増補改訂 ぼくの沖縄〈復帰後〉史プラス	新城和博	1200	2021

街の本屋を続ける理由

木村 晃（サンブックス浜田山）

出版不況と叫ばれ続けて、いったい何年たったのでしょうか。たしかに、あそこの本屋が閉店した、どここの本屋が閉店したという話はたびたび耳にします。長年営んできた店を閉めるという結論に至るまでには、ものすごい葛藤があったはず。そして閉店するには売り上げ減少、後継者問題など様々な理由があったことでしょう。

今年に入ってから隣町の唯一の本屋が閉店してしまって本当に寂しいかぎりです。お客さんからは「お宅は頑張ってるよ」と励ましの言葉をいただき、嬉しいと思いつつも切なさも感じてしまいます。

そんななか、いまなお地道に営業を続けている街の本屋もたくさんあります。店を閉めるのに理由があるように、いまなお本屋を続けていられるのにも理由はあるはずです。

その理由の一端が垣間見える東京都書店商業組合が配信しているYouTube「東京の本屋さ

んく街に本屋があるということ」が面白い。言い方はなんですけど、一見なんの変哲もない街の本屋を主に紹介しています。店の成り立ちや、棚の紹介、本屋を始めたきっかけなど、店主や働いている方へのインタビューもあり、同業者として興味深く視聴しています。

紹介されているどの本屋にも共通しているのは、長年地元でやってきた経験の積み重ねによって、それぞれの街に合った品揃え、そしてお客さんの好みに合わせた品揃えで棚が作り上げられていることではないでしょうか。配信も始まったばかりで、まだまだ認知度も低いとは思いますが、出版業界の方もちろんのこと、一般の方にも是非視聴してもらいたい。ありがたいことにうちの本屋も紹介していただきました。

うちは20坪ほどの売り場で、雑誌、コミック、実用書、児童書、学参、文庫、一般書とオールジャンルを扱う昔ながらの街の本屋です。親戚がやっているとということもあり、高校時代からアルバイトとして働きはじめ卒業と同時に正社員に。いつの間にか30年以上の歳月が経ってしまいました。とくに本が好きだからという理由で始めた仕事ではなかったけれど、長年やってきたおかげで、本に触ってきた分だけ作家さんや作品についての知識は積み重なってきたのかな、と思っています。なによりも本を売るという面白さを知ってしまいました。自分で選んだ本を並べ、お客さんに購入してもらったときの喜びは堪りません。

当たり前ですけど、最初はどのような作家さんや本が人気なのかも分らずに手探り状態でした。

分らないながらも、お客さんが購入された本の作家さんが、どういった方なのか、他にはどのような本を書かれているのかを調べて既刊本を揃えたり、新刊をチェックして仕入れたりしていました。その当時は加藤周一、鶴見俊輔、ドナルド・キーン、小林秀雄などの作家さんを追っていたのを記憶しています。いま現在もそうですが、とにかく気になる作家さんを調べては仕入れて並べるの繰り返しです。最近では若い世代の方に社会学系の本がよく売れています。うちでも岸政彦、伊藤亜紗、上間陽子などの既刊本を棚に揃えてみました。揃えてみると、すぐに反応があるのが嬉しいですね。お客さんもよく棚を見ていてくれるんだなど。

フェアも年3回ほどのペースで開催しています。フェアをやるうえで意識しているのは、出版社任せのフェアではなく、うちのお客さんに合いそうな本を出来るだけ自分で選書するように心がけることです。あと点数を多くして、あえて面陳せずに背表紙だけで並べることが多いです。面陳だと見栄えは良いのですが限られたフェアスペースのため、どうしても点数が少なくなってしまう、お客さんに飽きられるのが早いのです。面陳だと並べられるのはだいたい50点ほどで、コンスタントに売れるのはひと月といたところ。背表紙陳列だとだいたい300点は並べられて、フェア期間もふた月ほどはコンスタントに売れてくれますから。

いままでの印象深かったフェアを紹介させてもらいます。

2004年「平凡社 別冊太陽フェア」

約45日間。実売144冊。

本体計34万712円。

版型が大きく並べるのに苦労したけど、ロングセラーものを中心によく売れてくれました。またやっても面白いかなと思ったフェアです。

2007年「筑摩学芸文庫ほぼ全点フェア」

約60日間。実売457冊。

本体計53万7470円。

とにかく驚くほど売れて補充注文が追いつかなくてヤキモキしました。この期間中だけなら日本一売ったんじゃないかと思っています。

2009年「晶文社品切れ&僅少本フェア」

約80日間。実売240冊。

本体計49万3772円。



慶應義塾大学出版会 編集者が選ぶ今読んでほしい1冊フェア(2022年)

実売率65%をたたき出しました。このときは晶文社が一般書の刊行を縮小するという時期と重なったので、なおさら印象に残っています。

2013年「平凡社品切れ本フェア」

約70日間。実売171冊。

本体計44万8417円。

過去にもやったフェアだけど、このときのほうが売れました。実売率も57%達成。ちなみに前回は2006年開催で実売147冊。

2013年「みすず書房ロングセラー&僅少本フェア」

約60日間。実売116冊。

本体計34万500円。

ずっとやりたかったみすず書房フェア。めちゃくちゃ売れたというわけではないけれど、それなりに売れてくれて、ひと安心しました。



鎌倉の出版社 港の人フェア(2022年)

2014年「築地書館フェア」

約50日間。実売105冊。本体計26万2944円。

気象、生物など自然科学の本を中心に約200冊入れ、実売率52%。やったことがないジャンルでしたけど、しっかりと売れてくれました。

2014年「白水社品切れ&僅少本フェア」

約60日間。実売156冊。本体計34万760円。

うちで初の白水社フェア、実売率48%。こちらからお願いしたので、とにかくある程度売れてくれてホッとしました。

2017年「みすず書房VS白水社」

約70日間。実売93冊。本体計32万6025円。

僅差で白水社が勝利。白水社48冊、みすず書房45冊。白水社の営業からの持ち込み企画で、面白そうと思ってやってみました。

こうやってあらためて見返してみると、やっぱり売り上げが良かったフェアが印象に残っています。逆にあまり芳しくなかったフェアに関しては記憶から削除されているのかも知れません。

今年になってからは、2月から「慶應義塾大学出版会 編集者が選ぶ今読んでほしい1冊フェア

ア」と「鎌倉の出版社 港の人フェア」を同時開催中です。どちらのフェアも着実に売れてくれて嬉しいかぎりです。この先もやってみたい企画だったり、やってみたい出版社がまだまだあるので、想像しただけでもワクワクします。

いずれはフェアで人文会の出版社全制覇を目指して、楽しみながら街の本屋を続けていきたいと思っています。

木村晃（きむら あきら）



著者近影

荒尾市 図書館十書店プロジェクト、地域の活性化と本の力

藤戸 克己 (紀伊國屋書店 取締役ライブラリーサービス営業本部 本部長)

花田 吉隆 (紀伊國屋書店 九州地区店売第二部 部長)

有明海に面し、干潟と炭鉱で知られる熊本県荒尾市では、「つたえる・つながる・つづく」をコンセプトとし

た「あらお本の広場」(あらおシテイモール内)に荒尾市の新しい図書館を開館し、併せて紀伊國屋書店ではあらおシテイモール店を出店しました。これまで前例のない図書館十書店プロジェクトとして進めており、その概要や目指すところにつき、レポートいたします。

1 荒尾市について

①歴史と文化

荒尾市は熊本県の西北端、有明海に面して九州のほぼ

中央に位置しており、温暖な気候と四季の変化に富んだ住みよい風土に恵まれた地域です。

荒尾干潟は単一干潟としては国内有数の規模を誇る砂泥質の干潟です。2012(平成24)年、荒尾干潟中心部の754haが国指定鳥獣保護区の特別保護地区に指定され、7月に当時の有明海で初めて「ラムサール条約湿地」に登録されました。

荒尾市と隣接する大牟田市にかけて広がる三池炭鉱は国内有数の産炭地です。三池炭鉱万田坑は三井の総力を挙げてつくられた主力坑で、1902(明治35)年に石炭採掘を開始し、1951(昭和26)年まで出炭しました。その後、三池炭鉱は1997(平成9)年に閉山し

ましたが、万田坑は1998(平成10)年に国重要文化財、2000(平成12)年に国史跡指定を受け、2013(平成25)年3月に専用鉄道敷跡を含めて史跡となり、2015(平成27)年7月、「明治日本の産業革命遺産 製鉄・製鋼、造船、石炭産業」の構成資産として世界文化遺産に登録されました。

また、荒尾市は国の伝統的工芸品に指定されている小代焼でも知られています。熊本県の小岱山麓で約400年前から焼き続けられている九州を代表する陶器です。小岱山特有の陶土を原料として、古くからの技術や技法を現在に継承しています。

②緑と賑わいのある観光・商業・文化都市へ

石炭産業を中心として戦前より県内有数の鉱工業都市として発展してきましたが、昭和30年代以降は、石炭から石油へとエネルギー源の依存形態に変化が生じ、1997(平成9)年に三池炭鉱が閉山、2011(平成23)年には荒尾競馬が廃止となりました。こうした困難に工業団地の造成、住宅団地の造成、第三セクターによる商業施設(あらおシテイモール)整備などを実施し、人口

減少を最小限に抑えてきました。

近年では、図書館の移転のほか、市民病院の建て替えや地域高規格道路(有明海沿岸道路)が開通予定の競馬場跡地(あらお海陽スマートタウン)への道の駅等の複合施設の整備など、大型プロジェクトが進行し、先進技術をまちづくりを活用したスマートシティ構想を掲げ、市民の暮らしを便利で快適にすることで「暮らしたいまち日本一」の実現を目指し、各種施策を進めています。

2 図書館+書店プロジェクト 検討の経緯

①図書館の現状

荒尾市立図書館は1973(昭和48)年に中央公民館との複合施設として開館し、長く市民に親しまれてきました。延べ床面積789㎡、蔵書数は約10万冊、令和元年度の来館者数は約4万1000人。毎年コンスタントに約10万冊の図書が貸し出されています。

しかしながら次のような問題点を抱えていました。

- ・施設の老朽化。バリアフリー対策がなされていない。
- ・施設の狭隘化。蔵書数を増やすことができず、また関

覧スペース・キッズスペースが不足し、館内には学習スペースを設けることもできていない。

・絵本の部屋がある2階へのエレベーターがない。

その結果、十分な新着図書を展開できず、こどもや若年層の利用が少なく、魅力的なイベントも不足するという状況となりました。市民ニーズに応え、図書館機能を十分に果たすためには、新しい図書館を整備する必要がありますがありました。

②あらかしモール現状

あらかしモールは、荒尾駅周辺地域とともに荒尾市の中心拠点と位置付けられています。市の中でも人口の集積している地域であり、大型のアミューズメントパークやスポーツ施設と隣接、公共施設も集まっていることから、市外からの利用者も訪れる荒尾市の活性化を担う重要な拠点となっています。

あらかしモールは、市も出資する第三セクター、荒尾シティプラン(株)と荒尾商業開発(株)が連携して経営を担う形で、1997年4月にオープン。(株)イズミの運営する「ゆめタウンあらかし」やホームセンター

「DCMダイキ」といった大型店と中小の小売店からなるショッピングセンターとなっています。

③図書館移転に向けての検討

荒尾市では新しい市立図書館について2018(平成30)年度から庁内関係課において具体的な検討を開始。「荒尾駅周辺」及び「緑ヶ丘地区周辺」に都市機能を集約し、これらの二つの中心拠点と周辺地域を公共交通でつなぐことで、調和のとれたコンパクトなまちづくりを目指す方針とされています。このため、中心拠点から外れている現市立図書館についても現地建替ではなく、移転を前提として検討が進められました。

そのような状況の中、あらかしモールの運営会社の一つである荒尾シティプラン(株)の筆頭株主である(株)イズミから荒尾市に対して、紀伊國屋書店との連携についての提案がなされたことから、市・イズミ・紀伊國屋書店の3者で、市立図書館のあらかしモール内への移転整備について協議を行うこととし、事業スキーム等の検討を重ねました。荒尾市として今回の取り組みは、図書館の質的な向上、早期開館及びコストの抑



写真1 (荒尾市提供写真) 右から梶原前社長(当時社長): 荒尾シティプラン、浅田市長、高井会長: 紀伊國屋書店

制、あらおシティモールの活性化といった効果があると判断し、2020(令和2)年11月5日に3者(荒尾市・荒尾シティプラン・紀伊國屋書店)による連携協定の締結となりました(写真1)。荒尾シティプランにてあらおシティモールへの店舗の誘致を進め、紀伊國屋書店は施設内への書店の出店の検討、及び市立図書館移転整備についての市への助言を行うというものです。

また、連携協定の締結にあたっては、紀伊國屋書店より新図書館について、全社的な支援をお約束し、次のような提案を行いました。

- ・荒尾市のスマートシティ構想に連携し、新図書館には本格的デジタルライブラリーを設置する。
- ・紙の本に対する幅広いニーズに応え、図書館と書店の新たな連携により市の読書人口を増やす。
- ・本格的デジタルライブラリーにふさわしい内装デザインを提案する。

④ デジタルライブラリー構想

デジタルライブラリーについては、従来の国内の公共図書館には前例のない、新図書館の目玉となる施設とす

る提案を行いました。電子書籍やデータベースのサービスを提供するだけではなく、デジタル技術を駆使し、情報発信の機能を備えることで、地域との連携やモール全体の活性化に寄与することを目指した、新しい機能とコンセプトを備えた図書館施設の構想です。

その後、3者での検討を重ね、紀伊國屋書店はあらおシティモールへの出店を決定。2021(令和3)年12月には図書館の運営に指定管理者として携わることで議会承認をいただきました。

3 あらお本の広場

① つたえる・つながる・つづく

これは荒尾市にて新図書館の整備を始めるにあたって設定したコンセプト案のキーワードです。

- ・学びを「つたえる」図書館
- 生涯学習の拠点としてレファレンスサービスや郷土資料、閲覧スペースを充実させ、幼児から高齢者まで利用できる学びの場を創出する。
- ・交流活動と「つながる」図書館

学校や地域、団体と連携、市民の交流活動を推進し、居心地の良い空間を創出する。

- ・未来に「つづく」図書館
- ユニバーサルデザインやバリアフリーに対応、スマートシティにつながる未来型図書館とする。

② デザインコンセプト

①のコンセプトを受けての、後に「あらお本の広場」と命名される書店・図書館・カフェの設置されるゾーン全体のコンセプトデザインはシンガポールの設計事務所であるケイニー・タン・アーキテクトによるものです。同事務所は紀伊國屋書店シンガポール本店・NY本店・ドバイ店等弊社の店舗の内装デザインが高く評価されており、また、2002(平成14)年に「万里の長城コミュニティ」でベネチアビエンナーレ銀賞を受賞、「上海万博シンガポール館」の設計を担当、そして近年では「世界遺産シンガポールボタニックガーデン」の拡張プロジェクトを指揮するなど、アジアを代表する建築設計事務所として知られています。

図1はゾーニングの概念図となります。

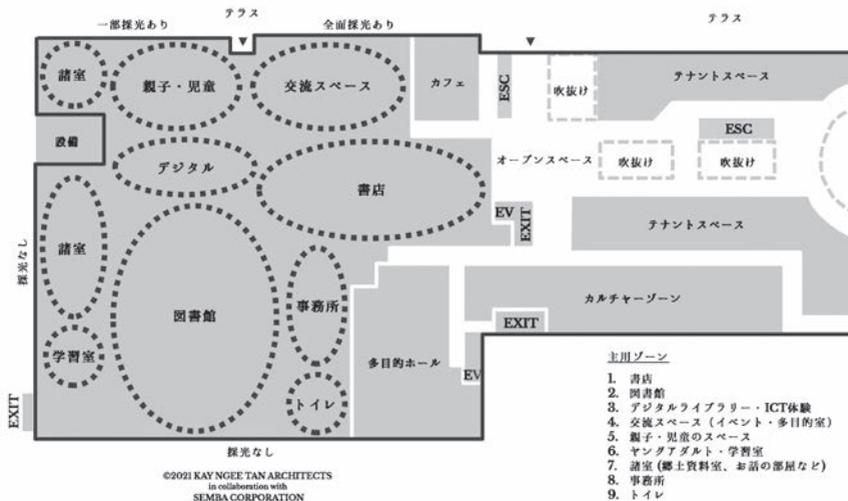


図1 あらお本の広場概念図

- このゾーニングの狙いは次のようなものです。
- ・書店をモール側に配置し、商業空間と図書空間のバッファとして機能させる。
 - ・交流スペースと親子・児童のスペースを採光のある面に沿って配置し、自然光のある賑わい空間に。
 - ・図書館は無柱空間である内側に設け、広々とした視認性の良い空間に。
 - ・デジタルライブラリーを賑わいの空間（おやこのコーナー）後出、写真（4）と開放的な書架スペース（干潟の広場）後出、写真（3）の間に設けることで、施設全体のデジタルハブとして機能させる。
- また、本の広場全体のコンセプトを次のようにイメージしました。
- ・干潟に広大な本の浅瀬へ、新たな発見と学びを求めて探索に行く。
 - ・炭鉱に積層された本の地底へ、人生の友となる一冊を求めて探検に行く。
- このイメージをどのように具体化していくか、内装設

計やサインのデザイン、そして図書館の機能面までを議論しながら組み立てていく作業を、その後重ねていくこととなりました。とりわけデジタルライブラリーについては、荒尾市教育委員会を中心に、紀伊國屋書店の設備担当、電子図書館担当、ケイニー・タン・アーキテクトや小学館、凸版印刷、船場などの協力会社各社を交えて知恵を絞り、新図書館に相応しいコンテンツと設備を備えた施設とすべく、議論を重ねました。

4 あらおシティモール店の概要

あらおシティモール店はシティモール2階に2022(令和4)年1月20日にプレオープン、4月1日の図書館の開館に合わせて店舗面積215・71坪、在庫冊数約10万6000冊にて全面開店(グランドオープン)となりました。

①とともに、未来へ

荒尾市立図書館との一体運営を通じて、図書館とともに、あらおシティモールとともに、そしてご来店いた

いたお客様と「とともに、未来へ」歩む書店を目指します。
・あらゆる世代に「ともにある空間」と「未来へと歩む1冊」をご提案します。

・「紀伊國屋書店から世界が見える」…常に最新の情報・話題の商品を売り場から発信します。

・「みんなが集まる楽しい空間」…家族・友達などみんなで行きたくなる書店空間を提供します。

また、デザインコンセプトを「荒尾市の干潟」と設定し、干潟を思わせる明るいライティングを採用。砂浜と海辺をイメージしたデザインの壁、エーゲ海ブルー色の什器、回遊性を重視したレイアウトが、実際の売り場面積以上に広々と感じる空間を演出しています(写真②)。

②ゾーニングと品揃え(図②)

・雑誌・実用…入り口付近に配置。普段使いのお客様に
新刊・話題書を中心にご覧いただける配置です。

・文芸・文庫…あらお本の広場入口から図書館への通路部分に配置。通路を歩くと様々な小説が目に入り、人
気・話題の小説を気軽に手に取っていただけます。



写真2 店内風景

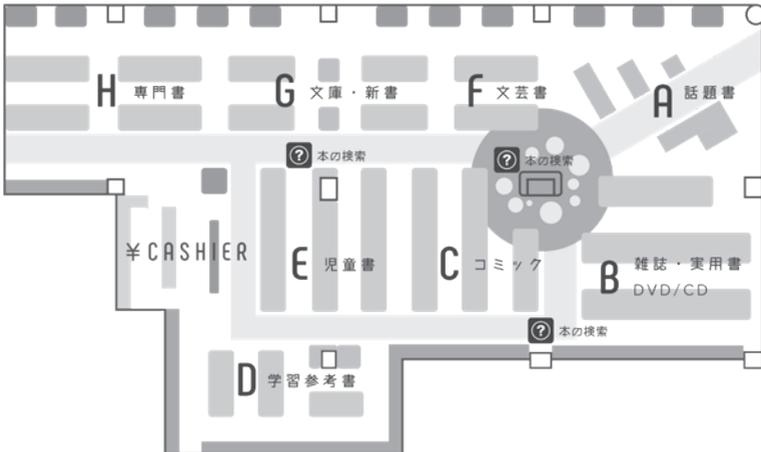


図2 店舗レイアウト

・専門書コーナーとして、ビジネス書、資格書、新書、人文、自然、看護分野の図書を、図書館入り口側に配置し、本好きのご要望にお応えします。

・児童書・レジ前のゾーンにボリューム感のある棚を展開。図書館で気に入った本をすぐにご購入いただけます。

・コミック・ライトノベル・図書館と競合しないジャンルであり、店の中心に配置し、施設利用者の多様なニーズに対応。在庫・品揃えを充実させます。

・学習参考書・売り場の奥に十分なスペースをとってしっかりとした品揃えを行います。図書館との親和性が高いジャンルでもあり、小中だけでなく高校学参も充実し、若い世代のニーズに応えます。

・DVD/CD…若年層向けに新譜話題作を豊富に在庫。アイドル作品などの予約も積極的に受け付けます。雑誌のエンタメコーナーに隣接しKPOP輸入盤も取り扱う等、メディアミックスや他の書店にはない商品をアピールします。

荒尾市在住の子育て世代、近隣の中高生など幅広い世代のお客様を想定し、あらおシティモールで買い物をさ

れた際にお立ち寄りいただき、少し落ち着いてお気に入りの本を選んでいただけるような、そのような店づくりを行っていきます。

5 新荒尾市立図書館の概要

新しい荒尾市立図書館はあらおシティモール2階に床面積3300㎡(約1000坪)、蔵書冊数約10万5000冊、電子図書館7000点、座席数250席にて2022(令和4)年4月1日に開館。

新図書館を計画のコンセプトである、学びを「つたえる」、交流活動と「つながる」、未来に「つづく」場として活用できるように、館内の各コーナーの配置や機能をも設計しました(図3)。

また、設計には有明工業高等専門学校建築科の学生にも参画いただきました。専攻科学生が3班に分かれて、新図書館の展示用什器のデザイン設計を提案。その3班の案を本職のデザイナー・設計士が協力をしてブラッシュアップ、図書館什器のデザインに取り入れており、「つながる」図書館をデザイン面からも具現化して

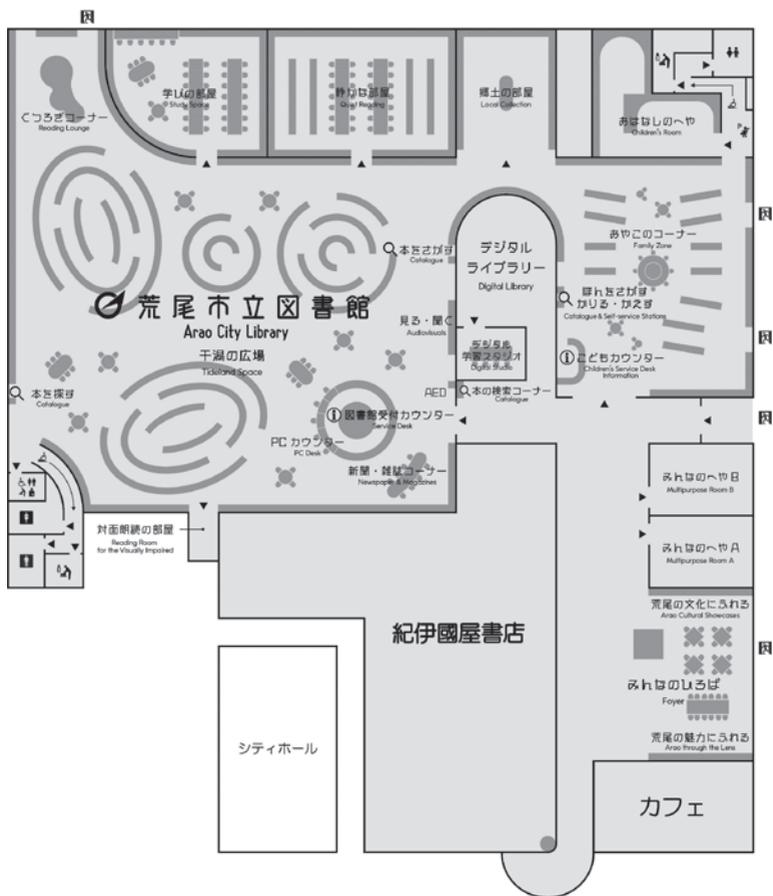


図3 図書館レイアウト

います。

それでは新図書館の各エリアの概要についてご紹介します。

①干潟の広場(写真3)

メインの開架エリアです。潮だまりをイメージした円形の本棚や海鳥が飛ぶようにゆらゆらときらめく照明など、荒尾ならではの「干潟」を感じさせる大空間にたくさんの本が広がります。

電子図書館／データベース検索用のPC、AV視聴用機器や対面朗読の部屋も広場には用意されています。カウンターには図書館スタッフが常駐し、タブレット端末の貸し出しも行っていきます。

②おやこのコーナー(写真4)

親子で本を読むエリアです。カラフルな船の本棚や水の柱、砂の壁などが干潟を感じさせる楽しい空間で、豊富な児童書や絵本との出会いを体験していただけます。

③デジタルライブラリー

図書館の中心に位置しており、デジタル学習スタジオのほかにも3種類の大型のデジタルディスプレイを壁面に設置、デジタルサービスをご利用いただけます。

・デジタル万華鏡(写真5)・・・画面に表示されるお薦めの書籍の表紙画像をタッチすると、その書籍の詳しい説明とQRコードが表示され、スマホやタブレットで電子書籍を読むことができます。

・フォトギャラリーサイネージCONBO(写真6)・・・画面表示される写真や動画をタッチすると市の歴史や文化、施設などの情報にふれることができます。図書館のメイキング映像も用意しましたので是非ご覧下さい。

・電子ペーパー・・・大きな画面で郷土の偉人(宮崎兄弟)の生涯を新図書館で新たに発表する小学館学習マンガで学ぶことができます。

デジタル学習スタジオには、インターネットでの発信機能を備えました(写真7)。近隣の施設へのリモートでの絵本の読み聞かせ、遠隔での授業の実施と、地域と図書館との連携に大いに役立てる予定です。荒尾市内の小中学校、有明高専からは早くも多くの利用の希望、活用



写真3 千瀬の広場



写真4 おやこのコーナー



写真5 デジタルライブラリー・万華鏡



写真6 デジタルライブラリー・CONBO



写真7 デジタル学習スタジオ



写真8 おはなしのへや

©佐藤振一

方法のアイデアが寄せられています。

④おはなしのへや(写真8)

紙芝居や絵本の読み聞かせができる部屋です。海辺の洞窟のようなダイナミックな空間にやさしく包まれながら本を読んだり、読んであげたり、読んでもらったり、いろいろな過ごし方で本を満喫できます。

⑤郷土の部屋

荒尾に関する史書などが閲覧できるほか、様々な展示を通して郷土の歴史や文化について学べます。遺跡の出土品なども実際に展示しています。

⑥静かな部屋／学びの部屋

読書や調べものに静かに取り組める部屋です。個別席を多く設置し集中できる環境を整えています。

⑦くつろぎコーナー

大きなベンチでゆったりとくつろいで本を読めるエリアです。壁面の大きな窓からは雲仙普賢岳を望めます。

⑧みんなのへや

講座や会議などで利用できる多目的室です。2部屋ありますが、可動間仕切りを動かし、1つの大きな部屋としても利用可能です。

⑨みんなのひろば

市民の皆様の交流スペースです。また飲食可能なエリアとなっています。市の伝統芸能や郷土の偉人である海達公子に関する資料を展示し、施設やイベントに関する情報発信も行っています。

館内には荒尾干潟の多様な生物(マジック、ムツゴロウ、シロチドリや貝、さかな、ヒトデなど)を表す小代焼の焼き物が埋め込まれた壁や、三井炭鉱で運行されていた炭鉱電車をデザインとして取り入れたガラス面のイラストなど、荒尾らしさを感じさせる仕掛けが幾つも取り入れられています。

是非実際に足をお運びいただき、マジック(荒尾干潟に生息するヤドカリの仲間、大変美味)を探していただくのも、この新図書館の楽しみ方の一つかと思えます。

ちなみに、荒尾市の公式マスコットキャラクターはマジック界の王子のマジックキー君です(図4)。

また、蔵書の管理にはICタグの採用による貸出管理や蔵書点検の合理化、電子図書館を紙の蔵書と併せて検索・活用できるOPACの導入、無料WiFiの提供など、デジタルライブラリーのコーナーだけではなく、随所に最先端の試みを導入しております。

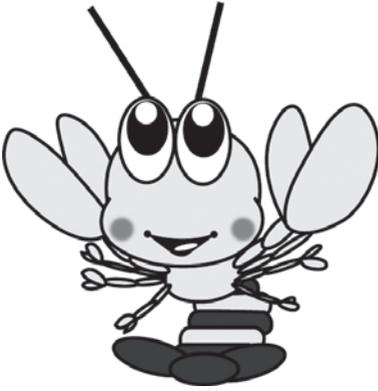


図4 マジックキー

6 本の力による地域への貢献

あらお本の広場は2022(令和4)年1月20日に書店部分(紀伊國屋書店あらおシティモール店)をプレオープン、4月1日に新図書館、カフェ(シアトルズベストコーヒール)をオープンし、図書館+書店プロジェクトの全面オープンを迎えることができました。

あらおシティモールの全体についても、外壁やテラス部分などの改修を行い、更には「あらお本の広場」を第1期として、第2期改修として9月中旬に向けてテナント店舗部分の改修、新たな店舗の開店を予定しており、荒尾市の文化と生活の拠点としての整備が進められる計画となっております。

紀伊國屋書店にとりましても、書店としての店舗経営と、隣接する図書館の指定管理者としての運営を同時に行うことは前例がなく、大きなチャレンジとなります。両者の相乗効果を生み出すべく、オープン時に実現されているもの、予定しているものを含めて以下のように計画しています。

- ・図書館の入口には、図書館蔵書＋電子図書館蔵書を検索する端末と、書店在庫を検索できる端末を並べて設置し、利用者が必要な本を容易に探せるようにします。
- ・デジタルライブラリーに設置する電子図書館のお薦め本紹介サイネージには、電子書籍に加えて、紙の書籍の図書館の蔵書、書店の在庫もQRコードを表示してご案内します。

- ・図書館に設置する展示や特集コーナーに対応して、書店内にも同じテーマの特集コーナーを設置して、興味を持たれた利用者の探索を深めるお手伝いをします。
- ・図書館で実施するイベント、書店として実施するイベントの内容やスケジュールを調整し、連続性や関連性を持たせたイベント、共同して実施するイベントを企

画します。

- ・図書館では地域の企業・学校やボランティア団体、荒尾市役所の関連部署などと協働する企画展示やイベントを実施予定です。書店では関連する商品を書籍に限らず取り扱い、実際に手に取っていただけるお手伝いをします。

紀伊國屋書店では、今回の荒尾市の図書館＋書店プロジェクトのミッションは「本の力」を最大限に活用し、地域の文化と経済の活性化と発展に寄与することにあると位置づけています。引き続き全社を挙げて、荒尾市プロジェクトの成功に向けて取り組んでまいります。

— 編集者が語るこの叢書・このシリーズ② —

サピエンティア・シリーズ

法政大学出版局のシリーズと言えば、「叢書・ユニベルシタス」と「ものと人間の文化史」を思い浮かべる方が多いと思います。叢書・ユニベルシタスは、人文会ニュース一八号ですでご紹介させていただきましたとおり、西洋思想を中心とした学術書の翻訳シリーズで、一九六七年に始まっていま一四〇巻を超えています。

「ものと人間の文化史」は、一九六八年から続く伝統ある一般向けのシリーズで、ある一つの物を通して日本史を読み解くというものです。最新刊の『地図』は一八七巻です。私も大いに関わっていて、執筆を依頼しにうかがえばみなさま大抵二冊くらいはお持ちで、それを初めて手にしたときの記憶とか、恩師やなかにはお父上が著者だったといった思い出も聞けて、とくに説明を

奥田 のぞみ (法政大学出版局 編集部)

尽くさなくても話がスムーズに進むという素敵なシリーズなんです、今回はあえて別のシリーズをご紹介します。二〇〇八年に始まった「サピエンティア」シリーズです。



私が法政大学出版局に入局したときは、学術書はユニベルシタスの翻訳書がメインで、日本語の書き下ろしはときどき単行本が出るという状況でした。大学出版部から日本の研究者の本も出していきたいね、それならシリーズにしたほうが図書館にも継続して入れてもらえるのではなどと先輩方と話しているうちに、新しいシリーズを立ち上げるようになりました。吉野源三郎さんが岩

波新書や『世界』を創刊したときの様子を『職業としての編集者』に書いておられますが、その気概や使命感に比べると、申し訳なくなるくらいいんびりした、でも新しいことを始めるんだという高揚感に満ちたスタートでした。

シリーズにするには、名称を決めなければなりません。漢語やサンクリットなども含め山ほど候補を考えましたが、やはりユニベルシタスにあわせてラテン語がよいだろうということで、五つほどに絞ってから職員全員による投票で決めました。サピエンティアとは、知恵とか叡智という意味です。ペンギンやペリカンのようなシリーズのマークもつくりたかったのですが、すでに法政大学出版局のマークもあるため、これは却下されました。判型は四六判でもA5判でもよいことにしました。カバーは装幀家と相談して何種類かつくってもらい、これも職員全員に意見を聞いて、最終的にいまのパターンになりました。

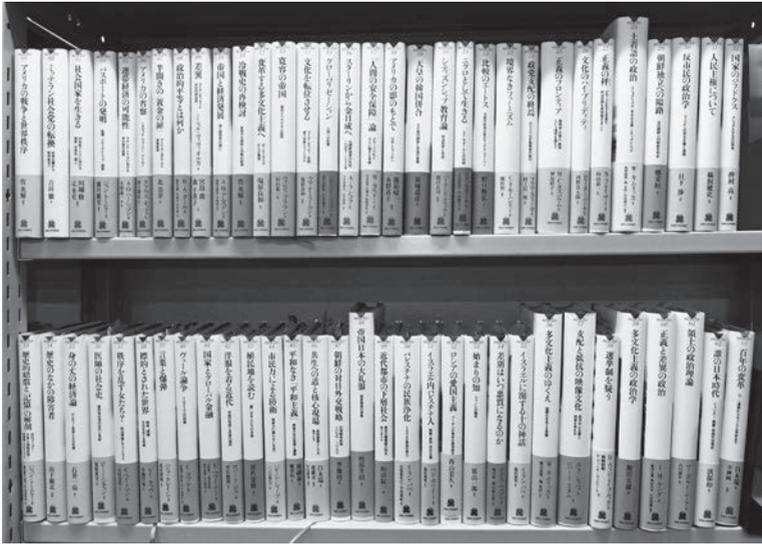
そして肝心のコンセプトですが、あんまりがっちり決めないようにはしました。ただ、著者は同時代の研究者であること、現在の問題を考えるきっかけになるような

テーマにすること、日本語書き下ろしでも翻訳物でもいいことを最低限のルールとしました。また、ユニベルシタスが欧米の翻訳書なので、その他の国々にできるだけ目配りしたものにしようということにもなりました。



こうして創刊したシリーズですが、準備段階よりも始まってからのほうがはるかにたいへんでした。まず、新刊が刊行予定どおりに出なかったのが大誤算でした。翻訳書はある程度スケジュールを立てやすいのですが、書き下ろしは構成を変えたり、新しい資料が見つかった一章書き換えたりすることもよくあるので、ずっと時間がかかります。定期的に新刊を出し続けている新書や選書のすごさを実感しました。営業部からは、お客様や書店や図書館に信用されないのではいかと何度も叱られました。

研究者のところへ執筆をお願いしにうかがっても、このシリーズを知っている人のほうが少ないので、まずそこから説明しなければなりません。翻訳書の場合、最初の頃は、「えー、ユニベルシタスじゃないの？」と言わ



2022年4月で、64号に到達する、サビエンティア・シリーズ。

れることが多かったです。あ、来ましたねウニベル。ええと、ウニベルシタスも小局の自慢の叢書なんですけど、サビエンティアは若くて新しいシリーズでまだよちよち歩きなんで、ぜひ先生のお力添えをと渾身の依頼をします。お相撲で言えば、横綱とか大関よりも小結を応援したくなる気持ちに訴えます。



新刊を出し、企画を立てるだけでなく、少しでも新シリーズを知ってもらうため宣伝・販売もがんばりました。チラシを研究者の方や図書館に送るのはもちろん、大学生協や書店でフェアをしていただきました。東京国際ブックフェアや大学出版部協会の企画説明会でお話しました。スートケースに本を詰め、関連する学会や講演会、シンポジウムにも出かけました。一冊しか売れなかったときは、帰りのスートケースがとても重く、このまま電車の網棚に置き去りにしたいと思ったりしました。タクシーの運転手さんに全然売れなかったとこぼしたら「そういう日もありますよ」と慰めてもらったこともあります。

創刊してから一〇年ほどは、苦戦が続いた印象があります。最近になって、ようやく知名度が上がってきたようで、「サピエンティア」をグーグルで検索すると小局の本が上位に出てくるので密かに喜んでいました。以前は同名の小惑星のほうが上位に来ていました。書評で取り上げられたり、重版する本も増えました。『誰の日本時代——ジェンダー・階層・帝国の台湾史』（洪郁如著）や『正義と差異の政治』（アイリス・マリオン・ヤング著）のように、半年も経たないうちに重版することも珍しくありません。『反市民の政治学——フィリピン の民主主義と道徳』（日下渉著）のように賞を受賞した本や、『朝鮮独立への隘路——在日朝鮮人の解放五年史』（鄭栄桓著）や『始まりの知——ファノンの臨床』（富山一郎著）のように韓国で翻訳出版された本もあります。

先生方とお話すると、サピエンティアで出版したいと名指しされるが増えてきました。ユニベルシタスに入りたいとはもう言われません。先日書店さんから、サピエンティアの今後の刊行予定についてお問い合わせの電話をいただき、とてもうれしかったです。ツイッターで「サピエンティア・シリーズぜんぶほしいな」と

いうつぶやきを発見したときは、感激してフォロワーになろうかと思いました。こうした声に励まされ、この四月には六四点目の『積み重なる差別と貧困——在日朝鮮人と生活保護』（金耿昊著）が出ます。ここまで続けてこられたのも、幕下力士の頃から支えてくださった皆様のおかげです。



サピエンティアは、書店では「叢書・ユニベルシタス」や「もの」と人間の文化史」のようにシリーズとしてまとまって棚に並ぶことはまだ少ないようで、私はこれまで二軒くらいしか見たことはありません。テーマごとに最適な棚に差している書店さんが多く、それはほんとうにありがたいことだと心から感謝しています。でも、まとめて並べてみると、中心よりは周縁の、大きな声よりはささやき声に耳を澄ます、そうしたシリーズになっていることが伝わるのではと自負しています。

世の中が一齐に同じ方向を向きそうなとき、このシリーズの本が立ち止まって考える手がかりになれたらいいなあと思っています。

人文会会員名簿

〒113-0033 文京区本郷2-20-7 みすず書房内

2022年4月現在

社名	担当者	〒	住所	電話	FAX
大月書店	佐藤 信治	113-0033	文京区本郷2-27-16 2F	3813-4651	3813-4656
紀伊國屋書店	段塚 省吾	153-8504	目黒区下目黒3-7-10	6910-0519	6420-1354
慶應義塾大学出版会	乙子 智	108-0073	港区三田2-17-31	3451-6926	3451-3124
勁草書房	東原 亮佑	112-0005	文京区水道2-1-1	3814-6861	3814-6854
春秋社	吉岡 聡	101-0021	千代田区外神田2-18-6	3255-9611	3253-1384
晶文社	福土篤太郎	101-0051	千代田区神田神保町1-11	3518-4940	3518-4944
誠信書房	郡司 恵太	112-0012	文京区大塚3-20-6	3946-5666	3945-8880
青土社	森 卓巳	101-0064	千代田区神田猿樂町2-1-1 浅田ビル1F	3294-7829	3294-8035
創元社	水口 大介	101-0051	千代田区神田神保町1-2 田辺ビル	6811-0662	3219-7800
筑摩書房	廣井 一茂	111-8755	台東区蔵前2-5-3	5687-2680	5687-2685
東京大学出版会	澤畑 壘	153-0041	目黒区駒場4-5-29	6407-1069	6407-1991
日本評論社	荻原 弘和	170-8474	豊島区南大塚3-12-4	3987-8621	3987-8590
白水社	岩野 忠昭	101-0052	千代田区神田小川町3-24	3291-7811	3291-8448
平凡社	登尾 純一	101-0051	千代田区神田神保町3-29	3230-6572	3230-6587
法政大学出版局	三木 拓	102-0073	千代田区九段北3-2-3 法政大学九段校舎1F	5214-5540	5214-5542
みすず書房	片桐 幹夫	113-0033	文京区本郷2-20-7	3814-0131	3818-6435
ミネルヴァ書房	本橋 弘行	101-0062	千代田区神田駿河台3-6-1 菱和ビルディング2F	3525-8460	3525-8461
吉川弘文館	片山 伸治	113-0033	文京区本郷7-2-8	3813-9151	3812-3544

代表幹事 片桐幹夫

会計幹事 片山伸治

書記幹事 水口大介

《◎委員長(幹事) ○副委員長》

販売・企画委員会 ◎吉岡 聡 ○段塚省吾・佐藤信治・福土篤太郎・登尾純一

調査・研修委員会 ◎森 卓巳 ○澤畑 壘・東原亮佑・廣井一茂・荻原弘和

広報委員会 ◎岩野忠昭 ○乙子 智・郡司恵太・三木 拓・本橋弘行

人文会ホームページ <http://www.jinbunkai.com/>

(各種情報/各社へのリンクはこちらからどうぞ)

目録のご案内

人文図書3分野の基本図書および最新刊を網羅した年度版の図書目録です。

- 人文図書目録刊行会発行 A5判・平均200頁 頒価本体(各)286円



◆哲学・思想図書総目録2022-2023年版

約1,300点(104社) 収載。

特別寄稿:井上達夫「ロールズからロールズを救う」

[掲載分野] 哲学・思想一般/倫理学・人生論/美学/各国哲学
/現代哲学/宗教一般/宗教学 ほか

ISBN978-4-915268-52-6



◆心理図書総目録2022-2023年版

約2,000点(94社) 収載。

特別寄稿:小俣和一郎「精神医学の歴史と優生学」

[掲載分野] 心理総論/基礎心理/発達心理/教育心理/臨床心
理/精神分析/精神医学/社会心理 ほか

ISBN978-4-915268-53-3



◆社会図書総目録2022-2023年版

約2,000点(118社) 収載。

特別寄稿:北村紗衣「フェミニズムは何を意味していて、いつ始まって、いつまで続くのか?」

[掲載分野] 社会一般/家族社会/地域社会/産業労働/福祉・
教育/社会問題/文化文明論/文化人類学/民俗学 ほか

ISBN978-4-915268-54-0

*ご注文は書店にお願いいたします。

- 人文会

〒113-0033 東京都文京区本郷2-20-7(みすず書房内)

- 人文図書目録刊行会

同上

TEL 03-3814-0131(みすず書房内)

魔術師と予言者

2050年の世界像をめぐる 科学者たちの闘い

チャールズ・C・マン 布施由紀子 訳
食料、水、エネルギー、気候変動——
30年後に地球の人口が100億人に増
えても全員この星で生きていけるのか。
科学で解決せよと唱える「魔術師派」と
自然保護のために人口増加や消費を抑
制せよと訴える「予言者派」の対立を軸
に、人類の直面する危機を描いた重厚
なノンフィクション ▼定価4,950円

紀伊國屋書店

出版部：東京都目黒区下目黒3-7-10
営業TEL03(6910)0519

見過ごされた 貧困世帯の「ひきこもり」

若者支援を問いなおす

低階層の無業・孤立者はなぜ不可視化されつつあったのか。
自ら支援を求めない若者とのかわりを描き出す。

東アジアの グローバル地域経済学

日韓台中の農村と都市
日本・韓国・台湾・中国について、農村・都市の経済構造と諸問題
に迫る共同研究。グローバル化と地域再生の視点からの分析。

【編】加藤光一
大泉英次
【価格】3,300円(税込)

【著】原未来
【価格】3,300円(税込)

大月書店

〒113-0033 東京都文京区本郷2-27-16

TEL 03-3813-4651 HP otsukishoten.co.jp

『人文会ニュース』バックナンバー公開のお知らせ

1973年6月に第1号を発行した『人文会ニュース』も既に100号を超えて久しく、読者の方からは過去の記事を読みたいという希望が寄せられることも多くなりました。

また会員社の移り変わりもあり、人文会として保存しておく必要性も高まり、本会創立50周年の事業としてバックナンバーのデジタル化に取り組みました。このたび一般に向けて公開することになりましたので、是非ご利用いただければ幸いです。人文会ウェブサイト、または下記のURLから閲覧ください。



URL <http://jinbunkai.com/contents/backnumber/>

慶應義塾大学出版会

<https://www.keio-up.co.jp/>

韓国「建国」の起源を探る

三・一独立運動とナショナリズムの変遷

小野容照著 日本・中国・米欧・ロシアを含めたグローバルな視点から独立運動の歴史的過程を丹念に描き、文在寅政権の掲げる「建国」神話を問い直す。

◎2,970円

食卓の上の韓国史

おいしいメニューでたどる
20世紀食文化史

周永河著／丁田隆訳 キムチ、クッパ、ビビンバ、冷麺などの韓国料理の成り立ちを通して 1876年の開港から現在にいたる100年の歴史をダイナミックに描く！

◎3,740円

〒108-8346 東京都港区三田2-19-30【価格税込】
Tel 03-3451-3584 Fax 03-3451-3122

世界を喰らう龍！ 中国の野望

ピエール・リアントワーンヌ・ド・ボネ
神田順子監訳 清水珠代／村上尚子訳

深刻な人権問題 隠そうともせぬ
拡張主義、巨大市場と大規模な環
境破壊……。中国は21世紀の覇者
か国際社会の問題児か。フランス
屈指の中国ウォッチャーが分析。



2750円(税込)

China.
Le grand prédateur.
Un défi pour la planète

春秋社 東京都千代田区外神田2-18-6
☎ 03-3255-9611 FAX 03-3253-1384

○web春秋 はるとあき 人気連載更新中!
<https://haruaki.shunjusha.co.jp/> →



ゆい ま 維摩さまに 聞いてみた

生きづらい人のためのブツダのおしえ



1540円

空とは？ 解脱とは？ さとりとは？ スーパー在家者「維摩さま」と文殊菩薩の対話から知る、ブツダのおしえ。異色の仏典「維摩経【ゆいまぎょう】」の世界をマンガ化！

細川貂々 釈徹宗 監修

晶文社 〒101-0051 千代田区神田神保町1-11
Tel.03-3518-4940 Fax.03-3518-4944

テトラローグ

こつちが正しくて、あなたは間違ってる
同じ電車で乗り合わせた、考え方がまったく異なる4人の会話が誘う哲学の世界。

税込2750円

大学生のためのビジュアルテラシー入門

原本万紀子

情報伝達のためにどのような視覚情報を提示し、そこから何を読み取るべきか。現代社会の必須能力。

税込2750円

思考力改善ドリル
批判的思考から科学的思考へ
植原亮

クイズ感覚で問題を解いてクリティカル・シンキングの力を養い、科学リテラシーがぐんぐん身につく！

税込2200円

勁草書房 TEL 03-3814-6861
FAX 03-3814-6854

〒112-0005 東京都文京区水道2-1-1
<https://www.keisoshibo.co.jp>

創元社

◆好評既刊◆

人類史を読み解くビジュアル年表の決定版！
A4判変型・上製・320頁/定価4950円

世界の歴史 大年表

(ビジュアル版)

定延由紀、李聖美、中村佐千江、伊藤理子 訳

世界的人物 大年表

定延由紀、李聖美、中村佐千江、伊藤理子 訳

知っておきたい事績から意外なエピソードまで、
圧倒的な情報量を誇る「絵でよむ人物年表」。
A4判変型・上製・320頁/定価4950円

大阪市中央区淡路町4-3-6 (税込)
TEL06-6231-9010 Fax06-6233-3111
千代田区神田神保町1-2 TEL03-6811-0662

メッセンジャー 情報発信者の武器

なぜ、人は引き寄せられるのか
S・マーティン/J・マークス 著 安藤清志 監訳 曾根寛樹 訳
人に影響し動かす存在、情報発信者(メッセンジャー)。
その情報発信の心理プロセスを学び応用する。2750円

ADHD 大国アメリカ つくられた流行病

アラン・シュワルツ 著 黒田章史・市毛裕子 訳
ADHD急増の裏で何が起きていたのか。医療関係者、製薬会社、マスコミ等を丹念に取材し、作られた大流行のからくりを暴き出すルポ。 3850円

人間の発達とアタッチメント

逆境的環境における出生から成人までの30年にわたるミネソタ長期研究
L・A・スルーフ/B・イーグランド/E・A・カルソン/W・A・コリンズ 著 数井ゆみき 監訳 工藤晋平 監訳 認知的・社会的・行動的側面に関する膨大なデータから人間の発達プロセスを描き出したミネソタ研究の成果。5720円

誠信書房 Tel 03-3946-5666
EISHIN SHOBO 東京都文京区大塚3-20-6

激動のウクライナ情勢。

不確かな情報と

フェイクが乱れ飛ぶなか

かれらは再び立ちはだかる。

ベリングキャット

デジタルハンター、国家の嘘を暴く

エリオット・ヒギンズ 安原和見 訳

平然と嘘をつく権力者。

その虚偽を真っ先に暴いたのは大手メディアではなく、ネット上に集う無名の調査集団だった。世界中が注目する彼らの活動の内実を初公開。

定価2090円

筑摩書房 営業部 03-5687-2680
*定価は10%税込です。

<https://www.chikumashobo.co.jp/>

窓の環境史

西川純司

近代日本の公衆衛生からみる住まいと自然のポリティクス

人びとは自身の生をケアするために、環境に依存して生きている。

人新世時代にとらえなおす、エロジジーをめぐる人文学。 3000円

地図の進化史

トーマス・レイネルセン・ベルグ

人類はいかにして世界を描いてきたか？

さまざまな媒体の上で世界を再現した地図を辿り、科学者や探検家はしめ世界を捉えようとした人々の軌跡を紹介する。 4180円

12人の皇帝たち メアリー・ヒアード

古代から現代までの権力のイメージの変遷をたどる

2000年に渡って12人の皇帝たちのイメージが芸術と文化の歴史に果たしてきた役割やその理由を、図版とともに紹介する。 4180円

青土社 東京神田神保町 ☎03-3294-7829
<http://www.seidoshaco.jp/> (価格税込)

第一級の基礎資料!

日本新劇 全史

完結!

全三巻

大笹吉雄 著

劇界重鎮が開陳する
日本現代演劇の姿と歴史。

- 第一巻(明治～終戦) ●33000円
- 第二巻(昭和二十年～昭和四十年) ●33000円
- 第三巻(昭和四十一年～昭和六十四年)
[5月刊] ●41800円

白水社 東京都千代田区神田小川町3-24
tel.03-3291-7811 ●価格税込

馬場紀寿
(東京大学教授)

仏教の 正統と異端

パーリ・コスモポリスの成立



「大乘仏教」でもなく、「上座部仏教」でもない——サンスクリット語からパーリ語へ、「聖なる」言語の転換から描きなおす新たな仏教史。3,960円(税込)

東京大学出版会

〒153-0041 東京都目黒区駒場 4-5-29
TEL 03-6407-1069 FAX 03-6407-1991
<http://www.utp.or.jp/>

フリードリヒ2世
シチリア王にして神聖ローマ皇帝
藤澤房俊

中世の頂点と凋落を具現する神聖ローマ帝国皇帝フリードリヒ2世。シチリア王国の併合をめざしてローマ教皇と幾度も対立し二度の破門を宣告された皇帝の生涯と事績をたどる。



A5判 / 266頁 定価3080円(10%税込)

平凡社 〒101-0051
東京都千代田区神田神保町 3-29
tel 03-3230-6573 fax 03-3230-6587
<https://www.heibonsha.co.jp>

学問としての 教育学

苦野一徳[著]
(熊本大学准教授)

「よい」教育とは何か。その哲学的探究を土台に、そのような教育はいかに可能かを実証的また実践的に解明し体系化する野心的試み。 **新版出来!** ■1870円(税込)

食卓から地球を 変える

あなたと未来をつなぐ
フードシステム

ジェシカ・ファンゾ[著]

國井修 手島祐子[訳]

気候変動が食料生産に深刻なダメージを与えている。この地球的危機突破のために私たちにできることは? ■2420円(税込)

日本評論社

〒170-8474 東京都豊島区南大塚3-12-4
TEL:03-3987-8621 <https://nippyo.co.jp>

2022年4月25日発行 年3回発行 第140号

発行所 人文会

〒113-0033 東京都文京区本郷2-20-7 みずが書房内

編集協力 アジュール・プロダクション

印刷 中央精版印刷株式会社

<非売品>